

私のふるさと



ふるさと喪失?

井戸 八穂子

あまりに幼少の時期を過ごしたのでふるさとの実感がありませんが、父母ともに香川県の讃岐広島出身で、私もここで生まれ5歳ころまで育ちました。

讃岐広島は塩飽諸島に属します。塩飽(しわく)とは瀬戸内海の西(豊後水道)と東(紀伊水道)の海流がちょうどぶつかりあい、まるで潮が湧くような海になることから名づけられました。塩飽諸島は塩飽水軍の島々。航海術にたけ、勝海舟率いる咸臨丸に乗り込んだ水夫も11人いました。

豊臣秀吉や徳川家康から朱印状をもらい、安土桃山時代から江戸時代にかけて「人名制」という自治権を得ていました。



(讃岐広島…中央に見えるのは王頭山)

時代を読み取ることにたけた塩飽水軍

「歴代の天下人から送られた朱印状がそれだ。織田信長から送られた朱印状には、天下布武の朱印があった。注目すべきは、徳川家康からの朱印状。日付が慶長5年9月28日とある。関ヶ原の戦いが慶長5年9月15日だから、早い段階で徳川が勝利することを読んでいたことがわかる。操船技術の高さを物語るエピソードも残されている。小田原城攻めのとき、塩飽水軍をはじめ四国・九州の軍船は米を積んで小田原を目指した。途中で台風に遭い、ほとんどの船が避難するなか、塩飽水軍だけは台風をものともせずにより切った。このことに豊臣秀吉は感心し、650人の船方に1250石

の領地を与えた。船方たちは「人名」を名乗り、自治を行った。塩飽水軍が勤番所を所有していたのはそのためだ。塩飽水軍の繁栄は江戸時代にピークをむかえる。幕府の御用船方として活躍し、廻船業で巨万の富を築いた。」

(2015年1月4日テレビ朝日放送 村上水軍と塩飽水軍 海の覇者 瀬戸内海賊ヒストリーより)



(旧尾上邸…廻船業で栄えた邸宅)

島は花崗岩でできていて、青木石(青みがかった御影石)の採掘と沿岸漁業が現在の主な産業です。最近外国からの大量の御影石の輸入により、石の採掘は衰退してきています。今年2月現在で島の人口は195人で、ほとんどが高齢者です。限界集落になるとおもいます。

小学5年生のとき、母方の伯父が新しい船を造りました。進水式のときは、にぎやかに船から餅を撒いて祝ったあと、親類一同揃って石段で有名な金毘羅宮に、船の安全祈願に出かけました。そのころの島は活気があり、船着き場には荷積みを待つ大きな御影石がごろごろしていました。祖父母も健在で親類もたくさんいて…、今からおもうとまるで遠い夢のようなできごとです。

島にはもう10年くらい帰っていません。10年前にはもう父の実家は竹とツタにおおわれ、朽ちかけていました。物言わぬ石垣ばかりが残るのみです。今は90歳半ばの母方の伯父が独りだけ暮らしていますが、いずれ親類縁者は誰もいなくなることでしょう。

奈良にきて茶粥が有名と知りましたが、私にとって茶粥といえば、祖母に作ってもらった碁石茶の茶粥の味が忘れられません。

\*碁石茶…高知県長岡郡で生産される発酵茶。黒色で碁石に似る。塩飽の船乗りが好んで食す。